

## 家庭における過剰な教育の社会要因の考察 —教育虐待を行った親のライフヒストリーに着目して—

森田友華 (ワンズハウス株式会社 武田塾川口校)

戦後の日本においては、出身階層によって入学できる学校や、獲得できる学歴が制度的に制限されることはなくなり、どんな社会階層の子どもにも均等に教育機会が与えられていたと思われていた。しかし高校進学率や大学進学率の高まりによって多くの人が学歴獲得競争に参加しており、東大やその他有力大学への入学機会は、戦後から変わらず特定の階層出身者に有利な構造が変わらずに続いてきた。家庭の経済力による、教育を媒介にした世代的再生産の傾向が存在しているという状態だ。その中で1980年に起きた神奈川金属バット両親殺害事件をはじめ、学歴獲得、強制される勉強、親への絶対的服従、それに伴う身体的・精神的な暴力が繰り返し行われた結果、凄惨な事件へと発展しているケースが生まれている。これらの事件は親の経済力・最終学歴の高い家庭で行われたものだった。しかし一部で、社会階層の低い親による「自分のような人生を歩んでほしくない」という思いから、世代的再生産から脱却するために家庭での暴力行為が注目されるようになった。2018年の医学部受験のために9年浪人した女性が母親を殺害した事件がその一例である。子育てを通して子の社会階層のグレードアップを狙った教育虐待を行っている家庭も一定数いると考えられる。2011年に当時武蔵大学教授であった武田信子氏は「教育虐待」という言葉を発表した。「子どもの受忍限度を超えて勉強させるのは『教育虐待』」であると述べた。(武田.2021)

本研究では、従来注目されていた金持ち・高学歴維持による教育虐待ではなく、貧困・苦勞からの脱却から発生する教育虐待に着目し、家庭内での教育虐待の行為者である親が、家庭において教育虐待行為になぜ及んだのか、アイデンティティはどのように構築されたのかを把握する必要があると考え、教育虐待を行った自覚のある母親へのインタビューを行い、語りの中から教育虐待を生み出した要因を整理した。インタビューの方法としては非構造化インタビューを行った。インタビュー対象者(以下Aさん)は、地方出身の高卒でシングルマザー兼社会人を経たのち職場内で結婚した。結婚後夫と娘と首都圏で生活する中で、小学校での生活、大学受験を通して教育虐待を行った。

教育虐待を行ったAさんは、自身の育った家庭の経済状況、当時の社会情勢によって自身は夢を諦めた経験、叶わなかった願望が、子どもに過剰な教育を行うきっかけとなっていることが分かった。Aさん自身の進学等の自己実現を制約する要素の大きなものに「経済事情」があったことから、結婚や子育てのプロセスで、子どもの教育に投資できるのなら可能なかぎり投資すべきだと、無意識のうちに行動していたと考えられる。Aさんの経験した、貧困による進学等の自己実現を制約させないために教育には金銭的に不自由ないようにした。しかし娘の将来の幸福追求/自己実現のために、「学力」「学歴」を基にした経済基盤を盤石にしていくことを当然視する社会イデオロギーに捕縛されたことから、自身の子どもに教育虐待を行った。Aさんは高卒であることで社会人生活の中で不利益を被った経験から娘にはAさんの望んだ大学を目指すように、暴力を用いて強要した。

自身の人生で自分の力では高学歴、高収入にならなかったことをコンプレックスに感じており、自身の人生の轍を踏ませないため、同じ人生を歩ませないための階層再生産からの脱却の意味での教育虐待を行ったと考えられる。

教育虐待を行う親の中には、「自分のような苦勞・貧困を味わってほしくない」という思いから無意識的に行為に及んでいるパターンがある。しかしこれは彼女たちの生きてきたこれまでの人生で、「自分の力ではどうにもならない貧困や苦勞」が要因であることが分かった。

以上のことから、教育虐待は世代間再生産のためだけに行われるのではなく、世代間施愛生産からの脱却のためにも行われることがあり、それらは家庭の責任ではなく、社会的な要因によって発生するため、教育虐待は社会問題として位置づける必要があると筆者は考える。また、教育虐待家庭での父親役割、塾や進学校の教育虐待への対応、児童虐待や居場所支援制度など、教育虐待を社会課題と位置づけるうえで、さらなる検討を積むべきであると考えられる。

(キーワード: 教育虐待、世代間再生産、学歴社会)